

廻り行く水を繋ぐ責任

池田学園池田中学校 三年 黒瀬<sup>くろせ</sup> ころ

「のどがかわいた。」寝起きはいつもこうだ。すぐさまキッチンに向かいコップに水を注ぎ一気に飲み干す。やはり、朝一番の水は最高だ。

「うまかどが。」背後から大きな声が聞こえた。祖父だ。

「こん水は、湧水と河頭浄水場の水が入った。ちょっとからなあ。」目をやると、自慢げな顔の祖父が仁王立ちになっていた。私の祖父は、鹿児島市の浄水場で働いていた。母が小さい頃から昼の勤務に加えて夜勤もこなして、私たちが安心して飲めるように鹿児島の水をきれいにしていたという。ミネラルウォーターを買わない祖父の顔には、いつも「蛇口から出てくる水はうまい」と書かれている。実際、私も日本の水道水はおいしいと思う。

しかし、世界に視野を拡げてみるとどうだろうか。飲める水と飲めない水があるという

現実。地球温暖化、水質汚濁など、人間の行動の影響で、様々な問題が勃発している。そして近年、我々日本国内でも目を疑うような大きな問題が発生してしまった。

二〇二〇年、千葉工業大学の研究チームが、北海道と沖縄の水道水から、マイクロプラスチックが検出されたと発表した。中でも注目されたのは、ポリエチレンテレフタレートなどペットボトルに含まれる成分だ。ペットボトルといえば、飲料の容器として当たり前どこにでも存在している、とても身近なものである。ペットボトルのゴミ収集日は、きまつてどこの家庭からも満杯のゴミ袋が出されている。

ゴミ袋の数と比例するように増えていくペットボトルなどの海洋ゴミ。こうした現状に胸を締め付けられ、私は二年前より海洋ゴミの一つである「マイクロプラスチック」について調査を始めた。鹿児島湾外では、海外から流れてきたゴミの多さに圧倒された。一方、

鹿児島湾内では、日本製のゴミばかりだった。つまり、私たち鹿児島県民が出したゴミがたどり着いたということだ。私は、この結果に大きな衝撃を受けた。さらに、一見美しく見える砂浜に、数限りないマイクロプラスチックがあることを確認した。砂浜で砕けてマイクロプラスチックになったものや、川からたどり着いたであろうマイクロプラスチックもある。

鹿児島は、国内でも河川の数が多い方だ。川の流れによってマイクロプラスチックが形成されているとすると、鹿児島の水道水にもマイクロプラスチックが含まれている可能性も否めない。蛇口をひねるとマイクロプラスチック入りの水。「その水が体内に」と考えるだけで喉元が苦しくなる。私は、透明のコップを手に取り水道水を注いだ。無色透明でいっもどおりのきれいな水だ。「大丈夫」私は心の中で何度もつぶやきながら、マイクロプラスチックで細かく観察した。どこから見ても透

明でキラキラと輝いて見える。マイクロプラスチックはひとかけらも見つからなかった。なんとありがたいことだろう。私はコップ一杯の水をゆっくりと口に注いだ。まるで地球上の水が廻り廻って、ここにたどり着いてくれたような感覚を覚えた。

祖父や祖先が繋いでくれた生命の源「水」。だれもが安心して飲むことができるようになるために、私たちにできることは何だろうか。私たちは、まず「水が飲める」ことが当たり前ではないことを、正しく素直に知るべきだ。そして、地球の資源を「使わせていただいている」という受け身の認識をもたねばならない。そうすることで、自ずと水を大切に使い、ゴミを捨てるべき場所に捨てて、資源として再利用するというサイクルが生まれる。意識すれば、今すぐにでもできることである。

一人ひとりの行動が、鹿児島のも、そして世界中の水をきれいにし、豊かな地球を未来へと繋いでいくと、私は信じている。